

信じよう。障がい者を。

山口小学校五年

清田 有里奈

私の姉は、障がい者です。生まれたとき、ウィルスがのうに入ってしまった、考える力がなくなったり、耳が聞こえなくなったりしました。そして、考える力がないので、言葉は分かりません。しゃべっても聞こえません。父は、シングルファーザーで、一人で子ども三人を育てています。私がまだ小さくて、はしで上手に食べられないとき、障がいのある姉もはしでうまく食べられなかったので、父は一人で、二人に同時に食べさせていたそうです。大変だったろうと思います。

ある時、家族みんなでアイスを買いにお店に行きました。すると、急に、

姉が大きい声でさけび出しました。見ていた人たちは、びっくりにした様子の人もいたし、こそこそ話している人もいました。私は、必死に姉をなだめようとしたけれど、ぜんぜんおさまりませんでした。結局、買うはずのアイスを買えないまま、家に帰りました。私は、どうして叫び出したのかわかりませんでした。

次の日、私は父に、

「パパ、お姉ちゃんは、ずっと、このままなの。なおることはないの。」と聞きました。父は、

「障がいはないんだよ。」

と言いました。私は、自分の部屋にもどり、考えこみました。姉の障がいは、なおらない。じゃあ、どうすればいいの。耳が聞こえないから、私の

言葉なんて一度も聞いていないし、言葉を聞いたことがないからあまりしゃべれないし、私が、考えこんでいると、にぎやかなしゃべり声が聞こえてきました。なんだろうと思いつながら、声が聞こえてくる方に行ってみると、父が、

「ご飯、ご飯だよ。食べよう。」

と、にっこり笑いながら、ご飯を表す手話をしていました。すると姉は、分かったようでご飯のところへ行っていました。

「パパ、すごい。どうやってお姉ちゃんは、覚えたの。」

「何回かしたら、覚えたんだよ。耳が聞こえなくても、手話で何度もやれば、覚えてくれるよ。」

と父が教えてくれました。すごい、聞こえなくても覚えられるんだ、姉は

姉なりにがんばっているんだ、周りを見ながら覚えているんだとびっくりしました。私は、この時、今まで自分が決めつけた見方をしていたことに気づきました。

障がい者だからと決め付けた見方は、今すぐやめよう、信じようと私は強く思いました。一人ひとりできることはちがっても、みんな同じ人間で障がい者でもできることはあるし、周りの人が信じることが大切だと思います。もし、以前の私のように決めつけている人がいたら、言いたいです。

「信じよう、きめつけず、信じていこう」と。